

平成 21 年 4 月 10 日現在

研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18320076
 研究課題名（和文）
 中英語後期から近代英語にかけての言語的性質の変容に関する研究
 研究課題名（英文）
 Linguistic Changes from Late Middle English to Early Modern English
 研究代表者
 家入 葉子 (IYEIRI YOKO)
 京都大学・文学研究科・准教授
 研究者番号：20264830

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：3003

キーワード：中英語・初期近代英語・語順・不定詞・定型句・ワードペア

1. 研究計画の概要

従来の英語史研究では、古英語・中英語研究がそれぞれの時代で完結する傾向が強かった。しかしながら、古英語期に始まった多くの言語変化は中英語期の後期に加速し、初期近代英語期以降の言語発達との間に密接な関係を有することがわかってきている。本研究計画は、中英語期から近代英語期の連続性に特に焦点を当てながら、英語史全体を再検討しようと試みるものである。

2. 研究の進捗状況

研究計画の2年目以降、インスブルック大学の Manfred Markus 教授を研究協力者に加え、本格的な共同研究の形態をとりながら、研究を進めてきた。インスブルック大学で作成された中英語諸文献のコーパスと初期近代英語期のコーパスは極めて有効な言語データを提供してくれており、研究代表者および研究分担者は、それぞれの担当分野で、着実に研究を進めている。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している

上記のように、インスブルック大学の協力で言語データの増強を図ったこともあり、研究はおおむね順調に進展している。研究代表者の家入は動詞の構文および否定構文において各種論文を執筆するとともに学会でも発表を行っている。同様に、研究分担者の大門は主に語順や文体について、谷と尾崎は定型表現等について、古英語から中英語を経て近代英語に至る通時的な視点から言語を分析し、その研究成果を論文等の形で発表している。

4. 今後の研究の推進方策

2009年度は研究計画の最終年度にあたるため、インスブルック大学においてコーパス言語学の国際学会を開催し、研究代表者の家入と研究分担者の谷が参加し、研究成果を報告する予定である。また、最終年度にあたり、過去3年間の研究の成果を論文にまとめることにも力を注ぎたいと考えている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

- ① 家入葉子「英語の否定構文における *neither A nor B* と *neither A or B*」『英語史研究会会報 研究ノート』2006年号: 1-5. 2006. 査読なし.
- ② 大門正幸 "Stylistic Fronting in Middle English". *Journal of the College of Humanities* 17: 13-33. 2006. 査読なし.
- ③ 尾崎久男「キャクストン訳『きつね物語』における「動作名詞」表現—中期オランダ語による原典との比較—」『言語文化研究』32: 51-70. 2006. 査読あり.
- ④ 家入葉子 "Unsupported Negative *ne* in Later Middle English". *Notes and Queries* 55: 21-23. 2008. 査読あり.
- ⑤ 家入葉子「Doubt にかかわる構文の歴史的变化について— *The Oxford English Dictionary* の引用文データの分析から—」『九大英文学』50: 317-338. 2008. 査読なし.
- ⑥ 大門正幸 "Language Structure as a Cultural Reflection". *Identity in Text*

Interpretation and Everyday Life, 121-131. 2008. 査読なし.

⑦ 大門正幸「統語的变化を中心に見た中英語と近代英語の接続」『中部大学人文学部研究論集』21: 25-41. 2009. 査読なし.

⑧ 尾崎久男「仏・英語間の「なぞり」(Calques)に関する一考察」『言語の歴史的变化と認知の枠組み』59-68. 2009. 査読なし.

[学会発表] (計 8 件)

① 大門正幸 "Stylistic Fronting in Old English Prose". SHELL2007 (名古屋大学). 2007 年 9 月 7 日.

② 谷明信 "Word Pairs or Doublets in the Paston Letters". SHELL2007 (名古屋大学). 2007 年 9 月 8 日.

③ 大門正幸「データ公開の重要性」日本英語学会第 25 回大会シンポジウム (名古屋大学). 2007 年 11 月 11 日.

④ 家入葉子 「*The Oxford English Dictionary*の引用文データを利用した英語史研究——doubtの検索例を中心に——」日本英語学会第 25 回大会シンポジウム (名古屋大学). 2007 年 11 月 11 日.

⑤ 大門正幸 "Language Structure as a Reflection of Cultural Schema". Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration International Conference (名古屋大学). 2008 年 2 月 10 日.

⑥ 家入葉子 "Money makes the mare to go or Money makes the mare go: The Verb to make and its Causative Constructions in Caxton's English". Hawaii International Conference on Arts and Humanities (ホノルル). 2008 年 1 月 12 日.

⑦ 大門正幸「統語的变化を中心に見た中英語と近代英語の接続」近代英語協会第 25 回大会 (広島女学院大学). 2008 年 5 月 23 日.

⑧ 大門正幸 "Stylistic Fronting in the History of English". 国際英語歴史言語学会 15 回大会 (ミュンヘン大学). 2008 年 8 月 26 日.

[図書] (計 5 件)

① 小倉美知子 (編)、家入葉子・大門正幸・他 (執筆) *Textual and Contextual Studies in Medieval English: Towards the Reunion of Linguistics and Philology* (Peter Lang) 2006. 216 ページ.

② Ch. Mair & R. Huebner (編)、谷明信・他 (執筆) *Corpora and the History of English. Paper Dedicated to Manfred Markus on the Occasion of his Sixty-Fifth Birthday* (Universitätsverlag Winter). 2006. 358 ページ.

③ 今井光規・西村秀夫 (編)、谷明信・他 (執筆)『ことばの響き』(開文社). 2008. 237

ページ.

④ 天野政千代・他 (編)、大門正幸・谷明信・他 (執筆) *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts* (Peter Lang). 2008. 403 ページ.

⑤ 田島松二・末松信子 (編)、谷明信・尾崎久男・他 (執筆)『英語史研究ノート』(開文社). 2008. 428 ページ.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

[その他]

該当なし